

戦争のエポック / 芸術のメルクマール
The Epoch of War / Monuments of Art

高島直之

TAKASHIMA Naoyuki

V 1939 ▶▶▶▶▶ 1945

第二次世界大戦：
SF的未来と芸術家の運命

1939

1939年の9月に、ドイツ軍がポーランドに進撃し、英仏両国がドイツに宣戦布告して第二次世界大戦が勃発した。そこに、39年のソ連のフィンランド進攻などをつけ加えていくと、この「戦争機械」と化した列強の侵略的事項の数は多い。30年代と大戦時代をつなぐ芸術と技術のイメージは、1937年のパリ万博「現代生活における芸術と技術国際博覧会」と、39年の「明日の世界」をテーマとするニューヨーク万博にあると言っていい。パリ万博の、46か国200棟のパヴィリオンが点在する会場の各展示館の設計は、ル・コルビュジエ、A・アールト、A・シュペーア、坂倉準三、B・イオハン、ヴァン・デ・ヴェルデ、M・ピアチェンティーニらが競っていた。主会場の入り口に、両国家のイデオロギーを記号化したドイツ館とソ連館が向き合って鎮座しているのが象徴的であり、展示物は、スペイン共和国政府館に展示したP・ピカソの《ゲルニカ》と、ドイツ館の流線型《メルセデス》車が注目された。大戦前夜とはいえ、不思議な取り合わせである。開戦年のニューヨーク万博は、「マシン・エイジ」の世界像を集約する未来イメージで統一し、とりわけA・カーン事務所と共同でN・ベル・ゲッデスがつくったジオラマ《フューツラマ》は、未来のメガロマニアックな物質主義を暗示したことで知られる。パリ博が、恐慌下と大戦を前にして、すべての生活と経済はルールを守って度をはずさない「秩序の回復」を内面化していたことに反し、ニューヨーク博は、輝かしい未来の消費社会を提示した。ソ連館の上には巨大な「労働者とコルホーズの女性像」が置かれ、アメリカが、ゲッデスによる実現されることのないSF的デザインによって一貫したモードを打ち出していたことは、第二次大戦後の2国間の力学

を予感させる。そのアメリカでの、リトアニアから移民したユダヤ系画家、アメリカ人画家、そして亡命オランダ人画家、それぞれ3名を例にして、この「大戦」とアートとを考えてみよう。

まず1898年リトアニア生まれのベン・シャーンだが、フランス19世紀末に起きたユダヤ人排斥の疑獄問題となったドレフュス事件に興味をもち、1930年にその水彩シリーズを描いて社会的テーマと出会った。さらに31年には、20年のサッコとヴァンゼッティ事件の「受難」を題材にシリーズ制作をした。シャーンは、42年に米戦時情報局に入って、多くの反ナチスのポスターを描いてナチズムを告発していった。また持続的に、移民・マイノリティ、農民や都市労働者の貧困と苦悩を画面に定着させていく。そのかすれた、途切れそうで途切れないカリグラフィックな線で描かれた民衆の虚ろな眼差しは、シャーンが、ヨーロッパと北アフリカ旅行から再確認した、出自としてのリトアニアの世界と深く結びついている。

1894年、米フィラデルフィアに生まれたステュアート・デイヴィスは、画家R・ヘンライの学校で絵を学び、社会主義誌『ザ・マッシュ』への挿絵寄稿を通して画家ジョン・スローンと交友し、10年代にアメリカ・ソーシャル・シーンを描いた。その後、ムンクやゴッホ、ブラックやマチスらの影響からその作風は目まぐるしく変化していく。35年には連邦美術計画(FAP)に参加し貧窮する美術家の救済に関わるが、40年には運動から手をひいて自分の制作に没頭する。立体主義をバネとして、都市的で色彩感覚に富んだジャズの即興性を思わず、軽快な画面構成をもつ「ポップな」抽象画に入ってしまった。立体主義というヨーロッパの遺産を、ジャズを通してアメリカ化していくその過程は、シャーンと対比的である。

1872年、オランダ中部に生まれたP・モンドリアンは、1919年よりパリで制作し、30年代にはナチスによって「退廃芸術」と名指され、ナチスのオランダ、ベルギーへの進攻を目前にして38年ロンドンへ移住、パリ陥落の40年にロンドンのアトリエ近くに爆撃があり、同年9月ニューヨークに渡った。アメリカではM・デュシャンによるモンドリアン評価が先にあって、この巨匠の亡命は歓迎された。モンドリアンのニューヨークでの独居生活は精神的に困難だったが、さまざまな人々の助けで維持される。独居の寂しさを、38年ロンドンで最初に見たW・ディズニーのアニメ《白雪姫》の物語に重ね合わせて、その心情を白雪姫のポストカードにしたためて、弟夫妻に郵送した。手元にそれが尽きると、自らディズニーのキャラクターを描いたともいう。モンドリアンの画面構成の原理は、水平と垂直の線によって統一されたが、戦争と亡命という現実のただなかで、ディズニー・マンガの丸まった曲線によって心を癒されたという事実がある。

ベル・ゲッデスが30年代に思い描いた、流線型と金属とのメガロマニアックなSF的未来社会イメージは、現代の「マシン・イメージ」においてもそのイメージの核は変わっていない。一方、上記3名の画家にとっての「戦争」と「現実」は、現在、忘れ去られているといいいい。この彼らの現実から、現代のSF的テクノロジー社会観を批判的に見ていくことが必要なのかもしれない。

[Photo Credit]

68 ©Hans Hofman/VAGA, New York & SPDA, Tokyo, 2000